

市長 市民の皆さんは、温かくて親切な方が多いんですが、隣の方へのお裾分けだったり、いただいたものへの感謝だったり、誰かの役に立つ満足感、充実感というのを、気持ちだけでなく、お金に換え、ビジネスとして考えていく視点というのは、どうしたら持てるのでしょうか。

齋藤 いきなりビジネスとか起業というところから入ると、ハードルが高すぎてなかなかうまくいきません。大切なのは、小さなお金を稼ぐ・回すという小商いの感覚です。

これは、大分県日田市の山村での例ですが、駅からだいたい車で40〜50分、山間の道を行くような地域で、お年寄りがつくっている自家用野菜をコンテナに入れ、地域のボランティアの方々が週1回収取するという取り組みが行われています。お年寄りの世帯では、自家用野菜って食べきれなくてどうしても余ってしまいますよね。この地域の方々はこの着目し、食べきれない自家用野菜を回収しているんです。そして、これらの野菜を地域の飲食店が仕入れという形で購入し、ちゃんとお金に換えているんです。お裾分けと同じ

側の持ち出しとなるお金は、行政が補ってあげるかたちでその後押しをする。それで試してみても、うまくいったら一緒にやる。仮にダメだったとしても、このやり方はうまくいかなないことがわかったと糧にする。こんなおらかさを持って住民の方々のチャレンジを後押し・共有し、うまくいったら地域として本格的にやってみよう。これを白石市バージョンで高速に回転させていくことが、変化につながっていくと思います。

市長 昨年、齋川地区の敬老会では、趣味の作品展を開かれていて、高齢者の皆さんは、お花や手芸、絵などを見られて非常に満足されていた。今までやっていなかったことをやってみただと思えます。まずは試しにやってみるというところでハードルを低くすることが重要なんですね。

齋藤 今こういう時代なのかもしれないんですけど、みんなが最初から完璧を求めようとはしません。行政なんか特に間違っちゃいけないという傾向が強くなります。ただ、人口減少・少子高齢化という世界でも前例のない状況下で前に進んで行こうとする場合、もっとチャ

感覚なので、その時々採れた野菜が何でもそのままゴロゴロ入っている状態なんです。飲食店側はこれをかき揚げうどんや、野菜中心の定食メニューとしてお客さんに提供しています。地域のお年寄りからのお裾分けなので、「おすわけ定食」という名称で。それまで食べきれなくて捨ててしまっていた野菜が、小さいながらもお金に換わる。お年寄りにとって生きがいに、民間事業者にとってはひとつの社会貢献にもなります。そして週1回のコンテナの回収は、それ自体がお年寄りの見守りにもなっています。日田市ではこの取り組みが福祉施策の一つとして、もっと他の地域にも広げようというところで、研修会を開催し



▲住民アンケートの分析から、地域課題への気づきを話し合う「小原未来塾」の参加者



▲旧齋川小学校で開催された「さらい齋川笑アップ塾」。ダンボール製の円卓を囲み、身の回りの課題を共有しました

レンジに対する寛容さが地域には必要だと思えます。今のやり方を変えること、新しく始めることへのハードルは、どうしても高くなりますが、チャレンジに対してハードルを上げるのはチョット待って。チャレンジを許す雰囲気、なぜ本格実施する前に実験しなかつたんだ！と言っていたら、いろいろの関係性が、これからは求められるのではないのでしょうか。

地域づくりのスイッチを入れる

市長 各地域のまちづくりに関わっていく中で、どのような期待や展望をお持ちでしょうか。

ているんですよ。地域内でお金を回すことで、お年寄りの活躍の場をつくる。それが結果的には福祉にもつながっていきます。これからは、民間が中心になってこうした取り組みや工夫を地域で増やしていくことが大切だと思います。行政はこうした取り組みの後押しをしていくことが、重要な役割の一つになっていくのではないのでしょうか。こんな取り組みが地域が増えていくと、やっぱりわくわくしますよね。

「試みやってみる」ことから始める

市長 福祉というのは、これまで以上に温かみを感じるようなかたちへ変わっていく可能性があると、思いますし、これからさらに人口が減っていく中では、間違いなく行政も住民も変わっていくなくてはならないと思います。変わるといふのは怖いことでもあって、難しいことでもあると思うのですが、変わるきっかけについて、どのようにお考えですか。

齋藤 いきなりガラッと変えようとする、当然、抵抗感や拒否反応が出ます。だから地域の方々は、いきなり本番をやるのやめまらえ前向きに進んでいこうと思っ

ていらつしやる方々が少なからずいます。現状や将来的な予測の値をストレートに出すと諦めムードに陥りかねませんが、白石市の方々は「分かった。どうする？」ってすぐ切り替えられる逞しさがあるんですよ。そういうところは、どんな厳しい状況でも何とかしちゃうんです。

市長 私もうまくわくわくして非常に楽しみです。地域をこれから支えていくのは、その地域に住んでいる「人」だと思えます。隣近所、同じ地域に住んでる皆さんが、協力し合ったり、お互いに声を掛け合ったり、自分にできることをちよ

しようよ、まずは実験からやりましょうよと言っています。実験です。当然失敗はつきものです。いろいろな場面でのいろんな方がいるものがあったら、それをみんなでやってみる。これを官民間問わず進めていくことが大切なんじゃないでしょうか。

齋川地区の話なんです。いろんな事業がありすぎて大変だと皆さんがおっしゃっていました。そこで、これまでは別々にやっていた事業を今年から一つにまとめて実施してみたいんです。ダメだったら元に戻せばいいじゃない。そんなお試的な気持ちでやってみてどうだったかというところ。これ

で、これからは、間違いなく行政も住民も変わっていくなくてはならないと思います。変わるといふのは怖いことでもあって、難しいことでもあると思うのですが、変わるきっかけについて、どのようにお考えですか。

つとずつすること、間違いなくその地域は元気になっていくと思えますし、そこで育つ子どもたちは、地域に誇りを持ちながら成長できると思います。自分たちの子どもや孫の世代に渡っても、持続可能な白石市を作り上げるため、多くのスイッチを我々市民に入れただけだと思えます。第6次総合計画が市民の皆さんにとって、自分たちの未来地図、設計図だと思っただけのような計画策定を進めてまいりますので、今後よろしく願います。本日はありがとうございました。



▲市民の皆さんが笑顔あふれる1年になりますように！